

栗原所長　インダーさん

「のびのび」の中で、一歩ずつ。インダーさんの挑戦

外国人財と、彼女らを迎える事業所の声を紹介する本連載。今回は、東船橋事業所で働くインダーさんと、成長を見守る栗原所長にお話を伺いました。



「最初は、とても緊張しました」昨年11月、22歳でインドネシアから来日し、東船橋事業所に配属されたインダーさん。来日前、「利用者さんの家に行って介護する、お風呂専門の仕事」と聞いた時は驚いたそうです。着脱も、最初はかなり苦手だったとのこと。それでも、「みんなが本当に優しくて、分からないことはすぐに教えてくれました」と振り返ります。少しずつ利用者さんのことも分かるようになり、できることも増えていきました。配属前にZoomで会った栗原所長には「厳しそう」と感じていたそうですが、今では笑顔で「全然違いました。優しいです！(笑)」と。



栗原所長も、その成長を頼もしそうに見守ります。「仕事を覚えるのが早い。でも、それは本人の努力があるからです。利用者さんからの評判も良く、苦手だった着脱も今では率先してやってくれます。本当にすごい勢いで伸びています」

東船橋事業所のモットーは「のびのび」。「仕事だけでなく、生活面もできる範囲で支えたい。スタッフ全員で支えながら、一緒に成長していきたいです」と栗原所長。インダーさんの次の目標は、もっと日本語を学び、利用者さんとたくさん話せるようになること。そして実務者研修を経て、介護福祉士を取得することです。「栗原所長は講師の資格も持っているので、本当に恵まれています」と、今の環境に感謝します。

プライベートでは、「浴衣を着てみたい、相撲を見たい、鎌倉の海にも行ってみたい！」と、やりたいことが盛りだくさん。チョコとコーヒーが好きで、日本食では天ぷらがお気に入りです。一方、仲間3人で挑戦した納豆は「全員ダメでした」と苦笑い。

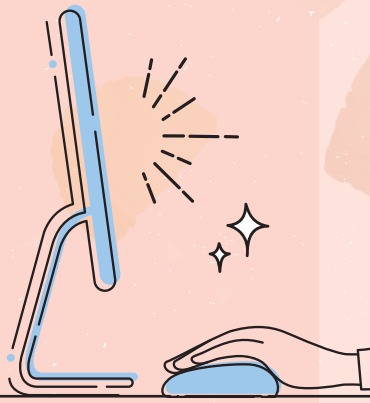
遠い故郷を離れ、日本で始まった新しい暮らしと仕事。周囲の支えを力に、一歩ずつ前へ。東船橋の“のびのび”とした空気の中で、インダーさんの挑戦はこれからも続きます。



AIで「書類をつくる時間」を減らし、「人と向き合う時間」を増やす



地域包括ケア推進室で西日本を統括する望月エリア長。平成元年に訪問入浴で入社し、長年にわたり現場とマネジメントの両面に携わってきました。現在は、西日本エリアの指揮や管理・指導を担いながら、AIを活用した業務改善にも力を入れています。



「主に活用しているのは、ケアマネジャー業務です。初回アセスメントの整理・分析、ケアプラン原案の作成、担当者会議、事業所内ミーティング、研修報告など、書類作成を中心に幅広く活用しています。また、地域包括支援センターの業務では、地域住民向け講話の構成づくりや企画立案などにもAIを取り入れています。」元々望月さんには、ケアマネジャーがケアプラン作成に多くの時間を費やす姿を見ながら、「何とか負担を減らせないか」という思いがありました。介護保険制度が始まった頃から、業務を体系化できる仕組みに関心を持ち、約6年前には人工知能活用の可能性について外部の研究チームから話を聞く機会もありました。その後、生成AIの進化をきっかけに、約2年前から本格的に活用を検討。PDFや画像を読み込めるなど、機能が大きく向上したことで「これは実務でも使える」と感じ、社内でも導入できないか各所に働きかけてきました。現在は、医療・介護分野に特化した生成AI「むすびなAI(※)」を2026年1月から導入しています。

効果は数字にも表れています。7月の効果測定では、部署全体の新規の帳票作成に関わる業務で約7,786分の業務時間を削減。当初想定していた効果を大きく上回る結果となりました。各事業所に推進委員を配置し、毎月オンラインで集まりミーティングを行いながら、活用方法の共有や習熟度向上も進めています。

望月さんがAI活用の先に見据えているのは、単なる時間短縮ではありません。「AIを活用して書類作成などの業務負担を減らし、その分、面談やコミュニケーションなど、人と向き合う時間をより大切にしていきたいと思っています。また、AIを職員の学びや気づきを支えるツールとして活用し、経験の浅い職員でも、ベテランの視点や考え方を参考にしながら、より良いケアプランや支援方法を考えられるようにしていきたいです。」 AIを使うこと自体が目的ではなく、そこで生まれた時間を利用者との対話や、職員の専門性向上に充てる。長年現場を見てきた望月さんだからこそ、AIを“人の仕事を減らすもの”ではなく、“人が本来向き合うべき仕事に集中するための道具”として捉えています。



※「むすびなAI」は、株式会社やさしい手が開発した介護・医療業界に特化した生成AIサービスです。